

イギリス人の見たイタリア(16世紀—19世紀)

—「イタリア論」のためのノート(一)—

家田 義隆

前書き

本論文で検討してみようとするのは、イタリアとは何か、イタリア人とはどういう人間であるかを明らかにしてみようとするものである。それを扱うにはいろいろの方法があろうが、私は外国人がイタリアをどう見、どう考えたかを歴史的にたどることによって、外側から見た考察をしてみたい。

その一つの試みとして本論は、イギリス人の見たイタリアを検討するものである。ルネサンス期の末、16世紀の中ごろからイギリス人はほぼ正確にイタリア文明を評価することができるようになった。William Thomas (?-1554) の「The Historie of Italie」1549年刊の頃からである。すでに15世紀の末ころイギリス人はイタリアの大学で新しい学問(umanesimo)を学んでいたが、まだその時は大学で学問をし、学位を得ることであった。ところが、トーマスの頃から学問だけでなく、もっと広く文明を学びながらイタリアを捉えて行くのである。そしてその経過の中で反撥し拒否するもの、受け容れるものを選び分けながらイタリア像を形成して行く。そして17世紀、18世紀、19世紀と数え切れないほどのイギリス人がイタリアを訪れ、時代を経るにつれ、イギリスの興隆と共にイタリアを過去の国として見るようになりながら、イタリアという国、イタリア人を、イギリス人流に捉えて行くのである。それをあとずけることでイギリス人の見たイタリア像を明らかにし

ようとしたものである。

以後同じ方法で、「フランス人の見たイタリア」、「アメリカ人の見たイタリア」、「ドイツ人の見たイタリア」を扱い、最終的には「イタリア論」として結論づけてみたいと思う。そのための一つのノートが本論文である。

一 宗教と倫理道徳

1300年以来、カトリック教徒大赦の年(jubilee)にはイギリスから何千人もの巡礼がローマをめざした。その人々の見たものは、ローマの富と繁栄に驚きの声をあげ、聖俗両界での宗教的な富と目眩めく儀式に圧倒されることだけだった⁽¹⁾。時には当時のローマの荒廃ぶりに気づいて記録している者もいる。「…かつてはあまたの君侯が住み、彼等の宮殿があったが、今や廃墟が並び、盗族がたむろし、狼、蛆虫がうごめき、荒野が連なっている」⁽²⁾、と。しかしこの廃墟の時代にイタリアで芸術のルネサンスが始まり、新しい学問(umanesimo)が芽生え始めていることにイギリス人は長い間気づいていない。ようやく16世紀の中ばにいたって、「……食べ物豊富で、学ぶことが完全にできること。秀れた大学、秀れた学者、秀れた学問、秀れた音楽の巨匠、武術の修練、高貴な人間、……なんでも学べる」⁽³⁾。当時のヨーロッパでもっとも文明を豊かに育てている国とイタリアを見られるようになった。このトーマスの記述より50年程前、15世紀の末から新しい学問はイタリアからイギリスへ移植されている。グローシン(William

Grocyn) (1446? -1519)、リナカー (Thomas Linacre) (1460? -1524)、コレット (John Colet) (1499? -1538)、ラティマー (Hugh Latimer) (1485? -1555)、スターキー (Thomas Starkey) (1499? -1538) 等によって高い水準で入っている⁽⁴⁾。6世紀にイタリアからキリスト教が輸入されて以来、新学問の輸入は、イタリアからイギリスへの影響史でもっとも意義深いものであった。けれども当時はまだ学問を学ぶことに一生懸命で、学問をし学位を得るところがイタリアであった。芸術の国とか教養を身につけた高貴な人を育てる国とかにはまだ目覚めていない。学問の国だけでなく、全体的に文明の国としてイギリス人がイタリアをつかんだのは16世紀の中ばからである。

しかし全体的にしる部分的にしるイタリアを手本としてイギリス人が迎ぎ見る時代は間もなく大きく変化し始める。迎ぎ見る目がなくなるのではない。時代と共に益々大きくなるが、しかし違った目を持つにいたる。ヘンリー8世によって始められたイギリス宗教改革が経過する中で、イタリアに対する態度が変り始めるのである。特にクラマー大司教時代のオキーノ (Bernardino Ochino)、ヴェルミッリ (Pietro Martire Vermigli)、トゥレメッリョ (Giovanni Immanuel Tremellio) 等の多数の改革派イタリア人のイギリス流入がローマカトリックを見るイギリス人の目を変え始めた⁽⁵⁾。ウィクリフ以来の反聖職者主義、反教皇主義的なイギリス人の宗教心と一緒にあってイタリアを見る別の目を浮び上らせてきた。それをもっとも鮮明に打ち出した最初がアスカム (Roger Ascham) (1515-1568) で、その著作 "The Schoolmaster" 1570年刊の中で、イタリア帰りのイギリス人を批判しながら、別の目でイタリアを見るようになっていった。彼の記述によれば、「……イタリア帰りのイギリスとは諺にいう "Inglese Italianato é un diavolo incarnato" のことで、そういう方々とは、姿と装いでは人間であるが、生活面と生き方では悪魔になってしまっている方々のことです。……なおよくおわかりにならないならば、充分説明いたしましょう。そういう方々とは、イタリアを旅し、イタリアに住み、

そのイタリアから宗教、学問、政治、経験、作法をわがイングランドへ持ち込んでいらっしまった方々のことです。宗教といえば教皇制、あるいはもっと卑らしいもの、学問といえば常識外れの内容、政治といえば派閥心と滔々とまくし立て、大げさな身ぶり手ぶりのしゃしゃり面、何事にも顔を突っ込む出しゃばり心、経験といえは以前イングランドでは知らなかった禍の数々、作法といえはくだらない虚栄心や、卑猥な生きざまのあれこれをお持ち帰りいただいた方々のことです。……これがキルケの誘惑であり、イタリアから持ち込まれたものののです⁽⁶⁾。イタリアから学ぶことは、悪徳と不善と無神論 (papist atheism) だけで⁽⁷⁾、それ以外なものもない。ピューリタンたちの見る反宗教的、反道徳的イタリアという見方がアスカムから以後強烈にイギリスをとらえ始めた。そういう雰囲気の中で、1570年ピュウス5世によるエリザベス女王への聖務停止令の発令があり、同年にはノフォーク公のエリザベス女王暗殺陰謀事件が起り、イタリア商人リドルフィの加担が明白になると、一気にイタリアはイングランドにとって危険な国になった。70年ころまでイギリス人が一番危険視していたのはスペインで、次いでスペインと手を組んだ教皇が危険の印であった。70年以後にはその中へイタリアが入ってきた⁽⁸⁾。

こういう危険の中をマンディー (Anthony Munday) (1553-1633) はイタリアへ向かって旅し、その旅行記として1582年に "The English Roman Life" を刊行した。反カトリック的な見方で終始した作品であり、イギリス人のカトリックを見る目をアスカムと共に明確に示している。そのローマへの途次、彼はイギリスからの宗教的亡命者にいたるところで出会い、彼等のイングランド蔑視と、罵詈雑言、女王エリザベスに対する不尊な態度、恨み言、叛逆的言辭、陰謀話しにびっくりしている。あまりの激しさに着かぬうちに「ローマは地獄そのものものだと思うようになった」⁽⁹⁾と記している。あとローマに着き、イギリス学院 (English College, 1578年設立) に寄宿して、ローマでの生活を記している。その内容はプロテスタントの目で徹底し

てカトリックを拒否している。「……聖ピエトロ聖堂、聖パウロ聖堂、聖ジョルジョ・ラテラン聖堂、聖マリア・マッジョーレ聖堂、聖クロチェ聖堂、聖ロレンス聖堂、聖セヴァスチアン聖堂の7つが主要な教会堂で、暇な時にこれらを巡礼した。どの聖堂にもたくさんの聖遺物が収められ、おおぜいの善男善女がつめかけ、それを下級僧が上手にあしらいながら、たくさんの賽銭をまきあげている。多くの腐った骨を聖者の骨だと信じこませながら、骨の安置してある聖堂の周りから骨を清めさせる。これらの骨から恐ろしいまでの聖性をひき出している。こういうことで善男善女は神への善行をしていると思っている。なんという穢らわしい愚行だろう」⁽¹⁰⁾。またカタコムでの情景では、「……骨を見つけると犬の骨だろうと羊の骨だろうと、あるいは他の動物の骨だろうと、それは聖者の骨、例えば聖アントニウスの骨、聖ブレーズの骨、あるいは他の聖人の骨だとし、名前を出したい聖人の骨にしてしまっている」⁽¹¹⁾。また「大きな聖堂の入口には怠け下級僧が狡るような仲間とたむろし、手に小さな聖像を持ってそれに礼拝させ、口づけさせて金を取っているが、……こんなことは傲ねることも、許可することもイギリス人には恐ろしい不遵極まることだ」⁽¹²⁾。「教皇様のしている諸儀式も“聖なる地獄”の見せ物だ。並外れた愚行と悪魔の考える筋運びだ。神様は軽んじられ、人は全く盲目にされている」⁽¹³⁾。「イースター前の木曜日には教皇様が聖ピエトロ聖堂の回廊に来て、色づけした大きなローソクに火を灯し、周りに枢機卿が集まり、一方の側はラテン語で、反対側はイタリア語で教皇様の一般的な悪口を歌う。それから教皇様はトルコ人、イギリス女王を呪い、イギリス女王をトルコ人よりもっと悪い残酷な専制王と罵る。同じようにカルヴァン派、ルター派、ツウィングリ派を罵る。呪い終えると教皇様はローソクを消す」⁽¹⁴⁾。またある時、聖パンクラチア教会で奇蹟を聞かされ、「わが生涯で聞いたうちのもっとも明白な嘘だ」とし、「こういう恐ろしい嘘を人間にばら播いていることを神様はどうお考えになっていらっしゃるのだろうか。神様の栄光を奪いとる行為であるし、神様への崇拜を

奪いとっていることである」⁽¹⁵⁾。異端審問制のようなことをやりだしたカトリック教会もイギリス人には許せないことであった。トフト(Robert Tofte) (?-1620) はこう書く「…すべての秩序と理性に反し、残酷で血なまぐさく、反良心的なものだ」⁽¹⁶⁾。こういう反カトリックの見方はこれから以後ずっと続くことになる⁽¹⁷⁾。けれどもカトリックの信者からすればこういうやり方が正しいキリスト教のあり方で、偉大な文明として受けいれられているが、イギリスのプロテスタント的気風には共感できない穢らわしいことであった。

こういう反宗教的、反道徳的イタリアという見方は1580年代に入ると文学者たちが繰り返し広めていった。例えば「……イタリア、地上の楽園とか享樂家の天国とかいわれるこの国は、……いったい何を教えているのだろうか。……そこで習ってくるものと言え、無神論に享樂説、女郎学に毒殺法に男色術、……隠れた漁色家、みえっばりの偽善者になることに役立つだけのこと。だから今日では、まともな人々の間では、名うての悪党に目印や烙印をつけるときに、“あいつはイタリア帰りだ”というのが合言葉になっている」。(小野協一訳)⁽¹⁸⁾あるいは同じナッシュの「……おおイタリア、人殺しの大学、殺戮の競技場、すべての国のための毒薬販売店よ、……イタリア式の陰險な手口の一切がひかえていて、人を殺しておきながら、マコトニモッテ我が意でなかったかのように弔意をあらわし、……自分のために人を利用しておきながら、それをばいっと棄て、……あげくの果てには絞首台行きにする」。(北川悌三、多田幸蔵訳)⁽¹⁹⁾こういう背教と背徳の国がイタリアだ、という見方を広めていった。文学者たちの背徳のイタリアという見方は、マキアヴェリとイタリアとの同一視から来ていることであるが、その経緯については別に論じたので⁽²⁰⁾、それを読んでもらいたい。16世紀の30年代からマキアヴェリはイギリスへ流れ込み、特に70年代には「ケンブリッジでマキアヴェリは大流行していた」とハーヴェー (Gavriel Harvey) は書き記している⁽²¹⁾。そのマキアヴェリ思想とイタリアを同一視して、イタリアを背徳の国として見て行っ

た。

17世紀に入ると数え切れないほどのイギリス人がイタリアを訪れる。スペインとの戦いの終結(1604年)で、イタリアへの旅行が安全になったことが大きかった。それ以前は政治的にも宗教的にも危険であった。16世紀の7・80年代に旅したイギリス人は実は戦々競々としながら旅していたのである。誰もが偽装し、イギリス人であることを隠してフランス人を装ったり、カトリック信者を装って旅したのである。やりそこなえば例えばアングリカンのアトキンス(Richard Atkins)(1559?-1581)のようにサン・ピエトロ広場で、1581年火刑にされたのであり、ウェップ(Edward Webbe)(1554-?)のようにスペインを探るスパイとして過酷に責め調べられたのである⁽²²⁾。それが大きく様変わりした。その経緯は当時のヴェネツィア駐在イギリス大使、ウォットン(Sir Henry Wotton)(1568-1639)がセシル卿への長い手紙で状況の変化を報告している⁽²³⁾。さらにチャールズ1世と仏王アンリ4世の娘ヘンリエッタ・マリーアの結婚で教皇庁との和解が生れ、教皇使節のパンザーニのイングランドへの来訪、ヘンリエッタ・マリーアの代理ハミルトン(Sir William Hamilton)のローマ着任で深い絆ができ、バルベリーニ枢機卿からロンドン市への贈物(絵画・彫刻)の提供があり、交友関係が大きく急速に進展した⁽²⁴⁾。こういう雰囲気の中でヘンリー8世からエリザベス時代にかけてのようなイタリアかぶれする旅行者はいなくなった。その代り旅行そのものが陳腐化し、個性を失い、誰もが同じガイドブックで、同じ宿をとり、同じ行程で旅するようになった。30年戦争の勃発はアルプス越えのイタリアコースを、マルセーユからイタリアへ入る道に変えて行った。ある者はマルセーユから海路でジェノヴァに出、ある者は沿岸伝いに陸路でジェノヴァに出、あとルッカへ、お金や手形の交換の必要のある者はリヴォルノへ出、そこからピサへ出てアルノ川をさか上ってフィレンツェへ、そこからシエーナへ、そこからローマへ、ナポリへ、再びローマへ戻ってボローニアに出、ロレートを訪ね、フェラーラへ抜けてヴェネツィアへ入る。ヴェネ

ツィアへはキリスト昇天祭の週に到着するように日程を組むのが普通であった。ヴェネツィアを立つと西へ道を取り、ヴィチェンツァ、ヴェローナ、ブレシアを経てミラノへ出、イタリアをあとにした⁽²⁵⁾。

40年代に旅したイーブリン(John Evelyn)(1620-1706)など典型の一人である。旅行することが容易になって、イタリアを見るイギリス人の目は鋭さを欠くようになった。政治的にも宗教的にも緊張が解けると、物見遊山の気分が強く、チューターやお伴をつれた貴族やジェントリーのグランドツアーがほとんどになる⁽²⁶⁾。学問や大伽藍への興味より、家具調度品、装飾品、宝石、庭園など、君侯の宝物や別荘の見学に興味は移った⁽²⁷⁾。そして盛んに石膏作品や版画や大理石像、書籍を買って祖国へ送るようになった。例えば1640年ころ、ストーン(Nicholas Stone)は父親の命令で次のようなものを買っている。ヴィナスとキケロの石膏頭像、ヴィニョーラの遠近法に関する本、数種のローマの噴水像、7種の印刷物と小風景本、古代のものを模刻した石膏の脚、ヴィトルヴィウスの建築書、石膏のサテュロス頭像、リヴォルノへ送る証明書、石膏製のバッカス像、リヴォルノへ送るリュートの糸、大理石製の多くの小品等々⁽²⁸⁾。絵の購入も17世紀から始まっている⁽²⁹⁾。「……五・六百デュカトで売られようとしているティチアンの作品があるやに聞いている。君がそれを慎重に調査することを望む。もしよければ全力を投じて買ってほしい。名前は出してはならないが、国王のためである。聞くところによると、その絵の中には4・5人の某ヴェネツィア貴族を描いた人物が入っているそうだ」⁽³⁰⁾。

17世紀は16世紀末の宗教的、道徳的イタリア嫌いの風潮が表面からしりぞいて、文化的イタリア愛好の風潮が大きくなるとなるとイギリス人をおおい始めたときであった。しかし前代の見方は表面から隠れたのみで、なくなった訳ではない。いつでも噴き出してくる。17世紀の末に旅したアディソン(Joseph Addison)(1672-1719)は、「ローマカトリックは巨大になりすぎた、子供っぽい、根拠のない迷信の大系であり」⁽³¹⁾、イタリアは「……祭りと迷信の国」⁽³²⁾な

のであると書く。

17世紀が貴族の子弟やジェントリーのイタリア詣うでの時であったとすれば、18世紀はさらにいろいろな層の人のイタリア称讃の時であった。ボズウェル (James Boswell) (1740-1795) がジョンソン博士の言として書き残している次のような気分が当時の人々の心であった。「……イタリアへ行ったことのない人は、人が当然見ているべきだと思われている物を見ていないところから来る劣等感にいつも捕われている。……われわれのすべての宗教、ほとんどすべての法律、ほとんどすべての芸術、文明へ至るほとんどすべての物は……」⁽³³⁾と。18世紀には貴婦人、紳士ばかりでなく、芸術家もイタリアを訪れ、模写し、スケッチし、巨匠の作品に関するノートを取りまくったのである。⁽³⁴⁾しかしローマカトリックを見る目は変わっていない。イギリス人には穢れたものとして映った。ハバート卿婦人 (Lady Pembroke) が息子に送った手紙には、「……私はお前がイタリアで駄目になってしまうことがないのを確信しています。イタリアの背徳、あるいはイタリアの宗教の欠如のことです。イタリアでは宗教はあまりにも馬鹿馬鹿しいものになっているので、不遵にも彼等がキリスト教と称しているものは、白痴が持っている宗教以外の何ものでもなくなっています。彼等の称するキリスト教は暗黒から漏れ出る光のような新約聖書のキリスト教とは似ても似つかぬものです」。⁽³⁵⁾教会の社会的な在り方についても、イギリス人の見たものは例えばスモーレット (Tobias Smollet) (1721-1771) のような見方であった。「……人殺し、泥棒、密輸業者、計画破産屋、いろいろの極悪人を教会は受け入れ、庇い……その特権をもて遊んでいる。……ローマの修道院の回廊で平気な様子で気晴らししている極悪人など、イタリアでは普通のことだ。私は3日前、臨月の妻を落ち着き払って殺した男をフィレンツェのある教会の階段で見た」。⁽³⁶⁾世俗の専制者のような教会の存在にびっくりし、激しい嫌悪を示し反撥している。19世紀にも例えばジェイムソン夫人 (Anna Brownell Jameson) (1794-1860) のサンピエトロ大聖堂での感想にイギリス人の見るカトリック

観が続いている。「……なんという巨大なという感覚が私の全身を貫いた。そして不快な感情がそれに続いた。ほとんど語ることも説明することもできなくした。……私がイギリスでゴシックの教会に入ったとき感じた、あの荘重な、恭々しくさせるような畏怖の念を経験しなかった」。⁽³⁷⁾

イギリス人の心の中に一貫してローマカトリックを見る観方が続いている。イギリス人の見るイタリアの一面である。

16世紀の末期に文学者たちを中心に背徳のイタリアが叫ばれ、イタリアを見るイギリス人の見方が表示されたのであるが、17世紀には宗教と同じようにイタリアに対する激しい反感の表現は姿を隠す。しかし18世紀に入ると再びイタリア人の倫理道徳と自分たちイギリス人との大きな異質性に気づく。例えば不快なこととして、イタリア人のチチスベオ (cicisbeo) の習慣があった。初めてイギリス人でこの言葉を文章に使ったのは、1718年のモンタギュー夫人 (Mary Wortley Montagu) (1689-1762) の手紙からのようであるが⁽³⁸⁾、スモーレットによると、「……フィレンツェの既婚夫人は彼女のチチスベオを持っている。いつでも、どこでも彼女の側を離れず、たとえ夫でもその権利にはあえて口出しをしない男友達である」⁽³⁹⁾。当時のイギリス人からすると許し難い習慣で、とても「イギリス人の夫でそれを耐え忍ぶ人はいないだろう」⁽⁴⁰⁾。ここからそういうことが平気のできる「イタリア女は地球上でいちばん高慢で横柄で気まぐれな女」⁽⁴¹⁾、と見えたのである。イタリア人からすれば「世界一やさしい人間であるイタリア人の優しさの一つの現われなのである」⁽⁴²⁾。スペンス (Joseph Spence) (1699-1768) もミラノで、「イタリアの亭主はとても優しいのがわかる」⁽⁴³⁾、とイタリア男の優しさを書いているが、それだからチチスベオは許されるとは考えもしなかっただろう。同じころイタリアを旅しているボズウェルは、「……チチスベオは人間の墮落の最後の段階を示すものと思う」⁽⁴⁴⁾、と書いている。

イタリアでは姦通が割合大目にみられているさまにイギリス人は驚く。ボズウェルはトリー

ノで、上流階級の間で姦通があけっぴろげで、多いのに驚き、その理由をたずねている。そしてその理由が、結婚が単に子供を得て家の存続をはかる手段であるからだ、と説明され目をみはる⁽⁴⁵⁾。同じ18世紀シャープ (Samuel Sharp) (1700?-1778) はこう書いている。「われわれの国イングランドでは、社会的な罪(姦通)を犯した女は普通自堕落になり、見捨てられていく。ここイタリアではほとんどの女が、秀れた女でも、一般の習慣に同化している。つまりだらしのない女と同じように罪に入って行ってしまう。それだからイタリアでは善悪の区別が、私の言っているのは、貞淑と不身持ちということだが、ほとんどないように思われる」⁽⁴⁶⁾。イギリス人の目からすると極めて道を外れてスキャンダラスな隠すべきことをイタリア人が人目に晒らすのに衝撃を受ける。この時代から半世紀ばかりしてイタリアに入ったバイロン卿でさえも当初は驚いている。「イタリア人の倫理感はかつて私が経験したうちでもっとも特異なものである。行動だけでなく分別の点からしても、道を外れることに関してイタリア婦人の場合特別である。彼女らが悪いこと、極めて道に外れたこととして、そういうことを考慮しないというのではなく、愛がその道を外れたことに対するいい訳であるだけでなく、その愛が無心で気まぐれでなく、1人に限っているならば、その愛を女の徳にしてしまうのである。彼女らはそういう考え方を驚くほど一貫して守っている。……マリアンナ(夫のあるバイロンの恋人)は、「私が心から彼女を愛しているのなら、そんなにお悩みならないで」⁽⁴⁷⁾、と言うのを聞いて当初はびっくりする。けれどもヴェネツィアでは「既婚婦人のほとんどすべてが愛人を持っていることなどよく知られたことです」⁽⁴⁸⁾。「ドージェの時代と全く同じで、婦人は夫と1人の恋人に関係を限っていれば貞淑な婦人であり、2人、3人あるいはそれ以上となるとちょっといき過ぎ……」⁽⁴⁹⁾、という状態を知り、「……ヴェネツィア自身はその歴史がすばらしいように見事なものである。しかしヴェネツィア人はどうだ」⁽⁵⁰⁾、と異質なあり方に背徳を感じた。

二 社 会

16世紀中ばのイギリス人の目からすると、イタリア社会はイギリスとは大きく異なる社会であった。イタリアは金持ちの層とごく貧しい層の二つがあるだけであり、アルプス以北で見られるような土地に根ざした古い貴族階級も存在がややふやに映る社会であった⁽⁵¹⁾。「……イタリアでは一度もバロンの存在を聞いたことがない。われわれイギリス人が騎士階級と呼ぶようなものもない。貴族もその下のジェントリーもイタリアにはいないようだ。ヴェネツィアで貴族(clarissimo)と称している者も、自尊心でそう称しているだけだし、……ジェノヴァでは貴族派と平民派が争っているが、その貴族派はある者は侯爵と呼ばれ、ある者は伯爵と呼ばれ、ある者は国王代理と呼ばれているが、実際はそういう身分ではなく、いろいろの機会に俗称して与えられているだけだし、……フィレンツェでは古くからの家柄の者はgentiluomini(貴顕・名士)と呼ばれているだけだ。一般にイタリアの名家は食事でも装いでも派手に誇示しない。商人であることも軽蔑しない。フィレンツェやその他では絹織物業者であることを軽んじない。イタリアの富の源泉はその工業であることをよく知っているからである。その富と儉約⁽⁵²⁾で彼等は宝石を持ち、現金を持ち、高価な家具をととのえ、きれいな庭を持ち、石造りの噴水を持って堂々とした宮殿を建てる。……反対に農夫や田舎の人々の生活は惨めである。牛や馬を使うように地主は彼等を使い、傭う。そして年末になるとクビにして追い出してしまう。イギリスのように借地契約もせず、召使いとしても使わない。だから農民たちは富をふやすことはできない」⁽⁵³⁾。こういう状況はダリントン (Sir Robert Dallington) (1561-1639) も記している。「トスカーナの農民は1年のうち3ヶ月しか小麦のパンを食べられない。あとは木の実を食べている。木の実のほかはない。ブドー酒は病気のときに飲むだけで、いつもは水を飲んでいゐる。全くこのトスカーナ地方の窮状はこのよう

言葉遣いだけが豊かで、その言葉遣いにはユーモアもみられるが、それで空腹を満たすことはできない。大地は丘がほとんどで、それは不毛で石ばかり。栄光や富は都市にだけあり、ほんの少数者にあるだけだ」⁽⁵⁴⁾。これらのことは50年前すでにトーマスも気づいて表現していたものであった。それがルネサンス期からのイタリア社会であった⁽⁵⁵⁾。トーマスは記す。「名家やその他の金持ちは全部都市や町に住み、田舎には小作農がいる。……大商人はその仕事のゆえに名声が下るということはない。名家に兄弟が幾人かいれば、そのうちの1人や2人は商人になって一門のために稼ぐ。職人は繊細な仕事をし、工夫をこらし、すばらしい。彼等は大金を稼いでいるが決して社会的ランクでは上って行くことはない。……田舎には小作農がいる。その小作農たちはイギリスのように決った地代を支払うのではなく、穀物やフルーツの1/2か1/3を現物で支払っている。地主は収穫のときには傭人を農地へ送って自分の取分を収穫させる。……しばしば地主が過酷であると、農民は自分の値段で作物を売ることもできず、また値段を強制的に決められてしまう。……哀れな農民はこのような劣悪なままにされている。ときには子供を育てるのにゾルゴパン（クズ粒パン）さえ手に入らないこともある。……金持ちは田舎に夏の数ヶ月を過ごすお洒落な別荘を持ち、いろいろの楽器を備え、リクリエーションのための諸道具を持っている」⁽⁵⁶⁾。イギリス人の目に映ったイタリアは大きな落差のある社会であった。金持ちは徹底的に豊かで、貧乏人はもっとも貧しい。ホービー（Sir Thomas Hoby）（1530-1566）は金持ちの豪華さに驚嘆の声を発した。アマルフィーでカピストラーノ侯爵の家に招かれたとき、友人のホワイトホーンと共に夕食後部屋に案内され、「……金糸やヴェルヴェットの布で飾った部屋に案内された。そこにはベッドが二つあった。一つは銀製であり、もう一つのヴェルヴェット製で、長い枕が置いてあり、シーツは手織りのとびっきり上等のニット製、云々」⁽⁵⁷⁾、と。豪華に飾られた部屋に驚き、またその親切なもてなし、客扱いに感激して記している⁽⁵⁸⁾。トーマスはミラノでの経験を記してい

る。「金糸やヴェルヴェットか絹の布で覆った馬車、また無数の刺繍をほどこした四輪馬車、婦人方の服装も最高のもので、職人の妻でも絹のガウン、金の鎖を持っていない者はほとんどいないことに驚くほかない。……ただ建物ではヴェネツィアやローマやフィレンツェには及ばない。石造りや大理石でなく煉瓦建てだからである。大聖堂は例外的にすばらしいが、完成できるかどうか人々は疑っている」⁽⁵⁹⁾。都市は豊かで農村は貧しいというのがイタリア社会で、それを見ている。サンディーズもヘイリーもあと同じように記す⁽⁶⁰⁾。

こういう二極に分化した社会で、繁栄する都市がそのまま繁栄を続ければ、都市の文明は継続して展開することができた。しかしイタリアではその都市が16世紀の末から衰退の道をたどることになった。特にスペイン治下の諸国は収奪の対象として富を奪われ、商工業者も商工業から手を引いて行ったのである。例えばミラノでは1616年から24年までの間に、武具師や織工が24,000人減少している。織物工場は70から実に15工場になり、禁止されていたにもかかわらず織工はマントヴァやヴェネツィアへ逃亡した。スペイン人は交易を汚いものとみなし、ミラノの貴族はそれを見倣って交易から資金を回収し、商人や銀行家は貴族に従って早々と商工業から撤退し、土地所有へ向っていった」⁽⁶¹⁾。ナポリについてはイーブリンが次のように記している。

「……国王代理のほか主要な役人としては宮内長官、提督、司法長官、侍従官、大法官、その人々の秘書がいて、驚くほど富裕である。彼等は貧しい民衆からびっくりするほどの富を絞りあげている」⁽⁶²⁾。17世紀に旅したラッセルズ師（Richard Lassels）（1603?-1669）は、「スペイン王の役人はミラノで吸いつくし、シチリア島で奪いつくし、ナポリでは骨までかじりつくしている」⁽⁶³⁾、と書いている。外国支配から唯一自由であったヴェネツィア共和国も、17世紀初めから30年代にかけて貿易港として、産業国家として決定的に衰退し始めた⁽⁶⁴⁾。フィレンツェも16世紀末スペインの影響下に組み込まれ、ダリントンが手厳しく指適したように、「……メデイチの治下に生きる者は惨な状態で生きる。

(Qui sub Medicis vivit, misere vivit.)⁽⁶⁵⁾こととなった。フィレンツェだけでなく、フィレンツェ支配下のピサも衰退の道を取り、「古くからのピサ人は臣従を強要される前に、シチリア、サルデーニャ、コルシカ、その他の地へ自発的に去って行った」のであり、「ピサと同じくシエーナもメディチ家への従属から没落の道をたどった」⁽⁶⁶⁾、のである。「この地方の人々は全くの不満の中で、かつて自由であった日を記憶にとどめつつ、今日のメディチの重い軛を背負って暮している」⁽⁶⁷⁾。

こういう社会は18世紀も同じで、「……民衆には何も知らせないでおくことを利益とし、知識を得ようとする者は追放されるか、黙らされてしまった」⁽⁶⁸⁾社会であった。イギリス人は実際にイタリアでこの状況を身をもって知ったのである。「……イギリス人にはどれほど会話が制限されねばならないか充分に感じられる。イタリアでの会話では、自由や政治や宗教についての問題をあえて口にしてはならないのである」⁽⁶⁹⁾。何か大きな覆いがかぶさっていて、自由に振る舞えない社会であった。二度の市民革命を経て絶対主義の時代をくぐり抜けた18世紀のイギリス人には、イタリアは全く専制の支配する世界であった。イギリス人から見るとその専制の支配の中で、イタリア人は上も下も専制者の前で諂い、媚び、阿ね、卑屈にひれ伏している社会に映った。そういう世界をそのまま維持し、放置したままにしているのに対し、例えばアディソンなどは厳しく批判をした。ヴェネツィアについて、「……共和国の維持ということにすべての考慮が払われている。貴族たちの間に奢侈と怠惰を勧め、聖職者の間に無知と放縦を育み、庶民の間に絶え間ない党派争いをけしかけ、修道院に悪徳と飽食を黙認し、ヴェネト地方の貴族の間に反目をかき立て、勇敢な人間を嘲り、名誉を失わせることに務めている。簡単にいえば国家利益のためには何をするのもためらわないこと、これがヴェネツィア共和国の洗練された知恵なのだ」⁽⁷⁰⁾。ローマについては「教皇の専制政治がかつて活気に満ちあふれ、充分豊饒な土地であったカンパーニア地方を、人の住まぬ荒野に変えてしまった。……現在のイタリアの

惨状は現実に生活してみて驚くほかない」⁽⁷¹⁾のである。19世紀にもほとんど同じ表現でラスキン(John Ruskin)(1819-1900)はこう書く。

「……カンパーニア地方のマラリアは教皇政治の結果だろうと思った」⁽⁷²⁾。何もせず抑圧のままの社会を続けた結果がイタリアの衰退をまねいたのだ、と。

三 性 格

イタリア人というのは、「……あえて言うならば、あの世のことは眼中にない。この世での安楽が第一義である。一か八かはやらないし、ちょっとしたことで個人的な復讐をするよりもっとプライドを持っている。死が目の前にあるようなことに身を晒すような冒険はしない。……本当に人生を冒険するような不屈の精神を欠いている。死後の魂の平安もうまく解決できないでいる」⁽⁷³⁾。現今の生活の安定にひたり切っているイタリア人は、「……よほど絶望的な運命でない限り、海でも陸でもどんな旅もしない。海陸での戦争もしないし、厳しい試練もしない」⁽⁷⁴⁾。また彼等は常に恐れを抱いて生きている。だから「外国へは出たがらないし、夜ノックされてもドアを開けない。ノックした人と話すためドアから顔を出すこともしない」⁽⁷⁵⁾。本当のことであったか、モリソン(Fynes Morison)(1566-1630)は、「……ロンバルディア地方のパン屋はほとんどがドイツ人である。なぜなら毒を入れて人を殺す手段を持つことになるイタリア人を信用しないからである」⁽⁷⁶⁾、と。「イタリアの紳士は名誉を非常に心がけているから、誰であろうと彼等を悪く言うものがあればその結果は死にいたることになるだろう」⁽⁷⁷⁾。ただその場合も決して決闘はしない。「……イタリアではほとんどかっとしての殺人というものを聞かない。もし人が殺されれば謀殺である。こういう謀殺にはプロがいて傭われてする」⁽⁷⁸⁾。

一般にイタリア人は平和を好む商人である。あるいは戦争を自分ではしない人々である。14世紀以来傭兵制の進展は、自分では戦争をしない国を作り上げてきた。それは16世紀末ころも同じで、「……当今のイギリス・フランス・スぺ

イン・ネーデルランドの間のヨーロッパ戦争でもほとんどイタリア人の活躍は聞かない。わずかにネーデルランドでナポリ人が戦ったくらいで、それもスペイン王に強制されやむをえず戦ったか、亡命ナポリ人である。……現今ではフランスやスペインの侵略に身をまかせ、侵略軍にひれ伏してしまっている」⁽⁷⁹⁾。「ヴェネツィア人は武器に訴えることなしに金で平和を売ったり買ったりしてきた。ほとんどのヴェネツィア人は軍人よりはよりよい商人になってきた」⁽⁸⁰⁾、というのは多かれ少なかれイタリア全体がそうだったのである。マキアヴェリが口をすっぱくして市民兵制を説いたことはイタリア人も感じていたことであつたが⁽⁸¹⁾、イギリス人から見ると怯懦に映った。18世紀にスペンスもイタリアに来て、イタリア人が古代ローマ人のような勇敢な戦う精神を完全に失っていることを記している⁽⁸²⁾。

もう一つイギリス人の見たイタリア人の性格の特長は、総じてイタリア人は口先が巧みなことであつた。「……イタリアでは言葉の丁寧さに惑わされてはならない。vostra Signoriaとは平民同志で使う言葉であり、molto magnificoとは単に市民間で使われる言葉であり、illustro Signorとは普通の紳士に使われる言葉である。……clarissimoとはヴェネツィアの紳士（貴族と称しているが）のことである。……一般にイタリア人は心地よい会話をする。どんな階層の人にも慇懃に話す。しかしほとんどあるいは全く、親密な会話はしない。彼等は一見話し易いが、長い付き合いでも親密にはならない。イングランドでならTom、Joh、Will、Dic、その他の渾名で呼び合ったり、親密な仕種をたとえ目上の人に対してでもするようになるものだが、イタリア人はこういう類の親密さをことのほか嫌う。そういうことを知性の欠如、論ずる能力の不足とみなす。彼等は普通、"言葉で来い、手では来るな"という。イタリアの諺では、"giogo di mani, giogo di Villani"、と言っていることだ」⁽⁸³⁾。

気楽に付合うことを一般にしないから、イタリア人は「格式張り、固苦しく、そこからどうしてもひかえ目になる。……フランス人が一般

に開放的で親しみ易く、饒舌であるのに対し、イタリア人は情熱的な気質にもかかわらず、地味であるように見える」⁽⁸⁴⁾。また「イタリア人の気配りは学んでほしいが、格好をつけたり、不便な儀礼を学んでほしくない」⁽⁸⁵⁾、とイギリス人は感じたのである。人と人との間に距離を置く態度は外国人に対してだけでなく、前述のようにイタリア人同志の間でも見られたが、例えば君主と家臣の間の親密さの欠如も、意外なこととしてイギリス人の受けとったことである。「イタリアの君侯は自分の身の安全を保持することを第一義に置いているから、君臣の親密な連がりがない。過酷な租税政策の実施で連がりを断ち、軍事面の仕事でもあまり臣下に経験をさせないようにしている。例えばヴェネツィアで言えば、海軍の大將や提督にはなれるが、陸軍のそれにはなれない。ヴェネツィア国家の自由を脅かすような陸軍における名声をヴェネツィア人が持つことになるのを恐れるからである」⁽⁸⁶⁾。安易に人を信じないのがイタリア人である。「護衛にしてもイタリア人は自国人を信用せず、オランダ人をもっとも信用して傭っている。フィレンツェ大公は百人のオランダ人を護衛に傭い、1ヶ月5グルデンの賃金を払っている」⁽⁸⁷⁾。ラッセルズ師もこう記す。「……イタリア人の落ち着いた賢明さは学んでほしいが、……何事も信じない姿は学んでほしくない」⁽⁸⁸⁾、と。

イタリア人の性格には荒々しいところがないと18世紀のイギリス人は見た。「……掏摸をしたり、ちょっと失敬して盗むようなことは好きだが、荒々しいことはほとんどしない。だから荒々しい殺人に及ぶような行為は大きな噂になることなのだ」⁽⁸⁹⁾。イタリアにも荒々しい殺戮行為はあった。14世紀から16世紀初めまで、残虐や殺しや、拷問や謀殺はいくらかあった。しかし外国人支配による専制政はイタリア人の気風を徐々に変えてきた。なぜこうなったかの問題は社会学の問題として解明されねばならないことであろう。

またイタリア人を世界一のなまけ者と見る見方もこの18世紀に生れてくる。「……イタリア人は世界一のなまけ者である。……野原を散策し

ながら木影で寝そべり、彼等特有の贅沢な気ままさで周囲の静けさや、温和な気候を享受しているように見える。イギリス人のような大胆なやりすぎに飛びこんで行くこともないし、フランス人のような躍ね廻る快活さもないし、ドイツ人のような負け知らずの粘液性もないが、イタリア人はいろいろの喜びの中に一種の落ち着いた感情を見い出す⁽⁹⁰⁾。ゆったりと散策しているさまを見てすぐ無為の徒として見てしまうのは、アクセク働いていないとなまけ者に見えてしまう当時のアルプス以北の人々の普通の見方であったが、イギリス人も同じ見方をした。さすがにゲーテはそういう見方の一面的であることに気づいている⁽⁹¹⁾。

四 学問・芸術

イギリス人が一番初めに学ぼうとしたのは絵画でも、音楽でも、建築でもない。正に学問であった。ボローニアでの法学、フィレンツェでのヒューマニズム、パドヴァでの医学を中心にイタリアは学問の中心地としてイギリス人を惹きつけた。特に前述の15世紀80年代からの新しい学問ヒューマニズムのイギリスへの移植は画期的なことであった。フィレンツェ黄金時代の最後の時期をグローシンやリナカーはポリツィアーノやカルコンディラスの下で学んだのであった。同じころコレットもイタリアで学んでいる。イギリス人にはイタリアは学問の国であった。この時代から半世紀あとの16世紀の中ごろもトーマスが残しているように(「秀れた大学、秀れた学者、秀れた学問」)、まだヨーロッパで第一の地位を占めていた。そしてイタリアでは活発にその研究成果が発表されていることをトーマスは実際の見聞として記している。

「……アカデミアが開かれている。それは学問に興味を持った人々の会合で、大公も会員の一人であり、会員の発表は大公より高い席からなされており、云々」⁽⁹²⁾と、もっとも感銘を受けたことの一つとして書いている。これから以後もイタリアの各地にアカデミアが生まれ、イギリス人は常に注目している⁽⁹³⁾。

しかしトーマスから30年もすると、イタリア

が学問の面で衰えてきているのをイギリス人は記しだす。モリソンは、「……イタリア人は生まれつき諸科学に対して深い探究心を持っているけれども、(現今では)いろいろの野蛮な民族の侵入や侵略で破壊され、学問は衰退してしまった。さらに続いて教皇がその篡奪した権力を保持するためイタリア人が無知であることを図ってきたので、イタリアの学問は栄光を失い、今日では北方や西方の民がイタリアを陵駕してしまっている」⁽⁹⁴⁾。1世紀前までイタリアの学問の中心であったフィレンツェについて、モリソンと同じころ旅したダリントンは、「……学問(liberall sciences)については、博学なギリシア学者といえるような人物を一つの学校で二人探しだすことはほとんどできない有り様です」⁽⁹⁵⁾。かつては奇羅星のごとくウマニスタを生み出し、ヨーロツパ中が新しい思想の発表を待ち望んだフィレンツェも、大公の支配する不自由な世界になってその輝きを失った。しかし実験的な自然学はまだヨーロッパで抜きん出た存在であったことに16世紀末のイギリス人は気づいていない。17世紀に入ってから気づくことである。

それでもまだ17世紀の30年代に旅したミルトンの場合は、フィレンツェに2ヶ月ほど滞在しているが、「……フィレンツェではいつもその討論の洗練されたあり方や、彼等の才能のすばらしさや、その趣味の洗練さを私はすばらしいと思った。フィレンツェ滞在中私はたくさんの地位のある人や、学問のある人と昵懇になったし、流行の文芸協会(Accademie)にも定期的に出席した。知識の交流や友情の維持には本当に役立つものだ」⁽⁹⁶⁾、と記して、イタリアの学問への尊敬心と評価を失ってはいない。しかし当時のイタリアはヨーロッパの学問的なヘゲモニーを担うような学者はごくわずかしかなかった。ミルトンから30年もすると明確なイタリア離れが始まる。学ぶところがイタリアからフランスへ変り始める。イタリア最良のラッセルズ師ですら、「若者はまずイタリアへ行くべきだ」と表明しながら、「それでも仕上げはフランスだ」⁽⁹⁷⁾、とフランスの優位を唱え始める。イタリアへは行って見てくるべきだけれども、学ぶ

ことはあまりない博物館になっていった。歴史、景観、諸技芸、科学の集大成された博物館になる。アディソンあたりからのイタリア観である⁽⁹⁸⁾。17世紀末には、イギリス人はイタリアはかつて偉大な学問の国であった、と見るようになったのである。

15世紀以来たくさんのイギリス人がイタリアを訪れたのであるが、イタリアの芸術については文学を除いて長い間その卓越さに気づいていない。トーマスやホービーですら、16世紀の中ばイタリアの各地を時間をかけて廻っているのに一行も芸術について記述していない。廃墟として残る古代ギリシア・ローマの遺跡、文物にのみ目が行き⁽⁹⁹⁾、当代イタリアの高い芸術にはまだ目覚めていない。あるいは評価していない。愈やく16世紀末に旅したモリソンのころから目覚め始める。モリソンはこう書く。「……絵画、彫刻、建築、金属や石の彫り物では、今も昔ももっとも秀れた巨匠たちである。アルプス以北の人々はみなイタリアから学んできたのだ。芸術の三分野に通じた現代の巨匠はミケランジェロで、イタリアの君主や国家からその作品を所望されている」⁽¹⁰⁰⁾。この点はダリントンも「……ただ絵画と詩の面ではすばらしい。フィレンツェのみでなく、イタリア全体が今日まで秀れている点だ。……ただ残念なことに今や恋にうつつを抜かし、教会は色で塗りこめられて、驚くようなものはなくなりつつある」⁽¹⁰¹⁾、と。絵で飾ってある世界を「色で塗りこめてしまった」、ととったのである。こうした見方がもう少し進むと、「イタリアの画家たちの描いた作品を人間の制作した偶像としてその偉大さを否定し、淫蕩なものだとか、欺満の巢窟であるとか、深い疑念をもって見ることになる」⁽¹⁰²⁾。このピューリタン的な見方がまたイギリスですっと後までイタリア絵画を見る一つの見方になるのである。ともあれ16世紀の末から芸術の国として評価できるようになった。17世紀はイタリア芸術称賛一色の時であった。そして17世紀末まで、イタリア芸術は学び、模ねる指針であった。絵画も彫刻も建築も装飾品も、文学も音楽もすべて学んできたのである。18世紀までそうであったが、それでもその中で気づいてきたことがあった。

「……イタリア人は人工の美しさを作り出すことは工夫しているが、自然の美しさに対する感覚がない」⁽¹⁰³⁾。規則的でありすぎて魅力に欠けると感じだしたのである。それはイタリアと感覚が近いフランスにもイギリス人が感じたことである⁽¹⁰⁴⁾。イギリス式自然庭園の作り方などにはっきりとその違いは表現され始める。

それにしてもイタリアの芸術の魅力は大きく、18世紀には前述のように貴族の子弟やジェントリーだけでなく、イギリスの芸術に志す若者もイタリアへイタリアへと旅し学んだ。イタリア芸術は学問のようにかつて偉大であったのではなく、18世紀には現在まだ生きて、学び模ねる対象であった。

五 雑

(イ) ペスト対策

16世紀の末からイギリス人の誰もが気づいたことの一つに、ペストとか流行病に対するイタリア人の警戒の嚴重なものと、その対策があった。モリソンによれば、「……彼等はペストの侵入には大変用心深く、その侵入を阻止するためすべての都市は役人を置いている。どこかでペストが発生したり、イタリアの近くで汚染されたような危険が生ずると、旅行客は陸上移動ができない。彼等にはやってきた地方の健康証明書 (bolletino) が必要となる。それがなければ Qnarantina と称する40日間の足止めをくらう。その間はラザレットかポスピタルに隔離され、健康診断を受けなければならない。船便の荷物や船による移動も同じで、出発地での明白な証明がなければ、40日間の留め置きに会う。特にコンスタンチノーブルからの船ではそうだ。こういう慣行をイタリア人は単に健康保持のためだけでなく、商売の秘密行為としてもやっている。商人や商品の質を都市内で流通する前に情報として知ってしまうためである」⁽¹⁰⁵⁾。50年後イーブリンも「健康証明書なしではイタリアではどの都市にも入国できない」⁽¹⁰⁶⁾、と記している。すぐ後ラッセルズ師も、「リヨンからイタリアへ入るときには必ずリヨンで健康証明書をもらっておくことを忘れるな」⁽¹⁰⁷⁾、と忠告し「ボロ

ーニアからフィレンツェへ入るときにも Bolletino di Sanitàを得ること。これがないとフィレンツェには入国不可能⁽¹⁰⁸⁾、と書いている。17世紀の終りまではこういう記述が必ず出てくるが、18世紀からはなくなる。ペストの流行が下火になったことが大きかったのだろう。それにしてもイギリスではこうした証明書を持ち歩く習慣がなかったので、イギリス人には面倒で忘れやすいことであったが、イタリアの衛生知識、予防体制に大きな感銘を受けたことは確かなことであった。こういう証明書の例をトフトが書き残している。

証 明 書

至高の御神と、もっとも高貴な聖母マリア様の御力と恩寵により、ロレートの聖地から出発のこの者たちは、名前は下記の通りであるが、ペストやその他の伝染性の病に全く感染していない清浄な体であることを証明する。

ルーベルト・トフト

マルカントーニオ・ディスティアーナ

ニコロ・ディ・ノヴァーヴィッラ

1594年2月27日

ロレート衛生長官

フランチェスコ・ベンソーネ⁽¹⁰⁹⁾

(ロ) 風俗習慣

イタリア人はイギリス人と違って運動する習慣がなかった。「……イタリア人は一般に運動しない。運動していれば外国人である場合がほとんどである。ヴェネツィアでもし君がボートを借りてリクリエーションのため気晴らしをしたいと頼めば、君の希望が運河を漕いで散策することだとしても、頼まれた人は君を売春宿へ連れて行くだろう。女と遊ぶことのほかにはリクリエーションなるものはないかのようだ」⁽¹¹⁰⁾。

「イタリアでは女は家に閉じ込められ、教会へ行くのも簡単ではない。召使いは老婆ばかりで男の召使いはないようだ。君侯の宮殿にはいるようだが別棟に住み、食事も別だ。他人の家で小姓をしてみるような習慣もイタリア人にはないようだ」⁽¹¹¹⁾。「着ている物は黒色がほとんど

で」⁽¹¹²⁾、イタリア紳士の普通の姿であった。17世紀の終りころも同じようにラッセルズ師は記している。起源はスペインとされているが、16世紀以後イタリアからヨーロッパ全域へ広がって行った⁽¹¹³⁾。

イタリアでは男に力がある。「売春婦でも家に連れてくることができる。妻は嫌だとも言えないし、嫌な素振りをすることもできない。売春婦は若くて健康なら町を歩いているとき、男たちから心からの挨拶を受けるし、称賛される。妻は夫を自分1人のものとして結婚するのではない。結婚の愛の1/10を持てれば満足している。結婚は親が決め、お互に会うこともなく一緒になる。夫は子供を得るためにだけ結婚し、ほかの女と楽しむのは自由である。妻は家に閉じ込められ、鍵をかけられ、老婆に監視され、窓からのぞく自由もない。教会に行くときにはヴェールをかけ、老婆が相伴する。……娘や姉妹も同じやり方である。修道女にしてしまうか、年頃まで修道院に入れておくかする」⁽¹¹⁴⁾。結婚は子供を得て家の存続のためだけにするという習慣は、18世紀のボズウェルも驚いて記していることだし⁽¹¹⁵⁾、修道院や尼僧院へ入れられてしまう二・三男、娘のことは18世紀にシャープが書き残している⁽¹¹⁶⁾。婦人を人前に出さない習慣はスペンスがミラノで見て記している⁽¹¹⁷⁾から、16世紀からずっとイタリアでは続いてきている習慣であった。

ただ婦人の自由の程度は場所によって大きな差があったようである。モリソンによれば、ジェノヴァ、ブレシア、ベルガモ、シエーナなどでは相当の自由があったような記述をしている。

「……私はジェノヴァほど婦人が自由を持っているところを知らない。しかるべき若者が街角に立って、窓辺の娘に恋を語りかけているのを見たことがある。……ブレシア人はフランスの影響を強くとどめており、ベルガモと共にフランスの支配下にあったことがあり、女はヴェールの代りにスカーフを着けているが、これはフランスのファッションである。そしてフランス風の自由を持っている。テーブルでの会話、ダンスをすること、町で出会えば挨拶等を女がしているが、ほかでは女には一般に認められていな

い自由だ。シエーナも同じで、女が集会をし、ダンスをし、会話の自由を持っている。ほかの場所ではダンスなどカーニヴァルのときしか許されない。フランスに近いジェノヴァではブレシアの婦人と同じほどの自由を持っている。テーブルでの会話、おしゃべり、町中での挨拶等々」⁽¹¹⁸⁾。フランスの勢力の入ったところでは女に割合自由が確保されていた。

まとめ

結局イギリス人にとってイタリアとは何であったのか。もちろん16世紀から20世紀まで、イギリス人のイタリア観が一貫して変らなかったというのではない。イタリアが17世紀の後半を境にヨーロッパの周辺国へと転落して行ったのに対し、イギリスは二流国から一流国へと浮上して行った。その間に、単に仰ぎ見、学び、模ねる国から、尊敬はしながら、それでも「かつて」偉大な文明の世界であったと見るようになって行った。イタリアを見るイギリス人の視点が大きく変って行ったのである。その変化する視点の中で、イギリス人はイタリア像を形作ってきた訳であるが、それはどんなものであったのか。

一つには、

イギリス人の目からすると、イタリアは祭りと、儀式と、迷信の国だ、ということである。この見方にはイギリスプロテスタントの偏見が大きく作用し、強調のしすぎ、誤解もあるが⁽¹¹⁹⁾、イギリス人のイタリア像の一つであることは確かである。

二つには、

イギリス人の目からすると、イタリア人は背徳の人だというのが、長い間のイギリス人の目である。マキアヴェリが『君主論』で新君主に推めた格率をそのままイタリア人の倫理・道徳と同一視したところからきている誤解である面が多いが、イタリア人を見るイギリス人の目になっている。もう一つの面は、バイロンのような生き方をした者から見てもなお特異なものとして映ったイタリア人のモラルが、イギリス人には背徳で自堕落に見えた。

三つには、

16世紀後半から以後、イタリア社会はイギリス人の目からすると、専制の支配する社会であった。スペインの直接統治下はもちろん、その支持下のイタリアの専制君主の統治下でも、抑圧され、自由のない社会であった。その社会の中では上も下も阿ね、諂い、媚びる社会で、それが儀式張り、人を信用しない社会を作り出してきた。こういう社会の見方がイギリス人のイタリア像の一つである。

四つには、

イタリア人は平和好きの商人であること。尚武の北方の国イギリス人から見れば、必要なときにも戦を避ける怯懦な国に映った。それにしても戦争よりは平和を好む人であるとイタリア人を見た。

五つには、

イタリア世界は徹底した都市の世界だということである。田舎には何もないし、田舎では何も創造されない。すべて都市が作り出す世界がイギリス人の目からするイタリアであった。

19世紀の20年代までおよそ以上のような見方をイギリス人はイタリア像として形作ってきた。1820年代以後ナポレオン戦争の終結は、イギリス人の猛烈なイタリア旅行熱を巻き起こした。このときは18世紀よりさらに広範な市民階級のイタリア旅行で、このころからイタリア人にとって、旅行者とはイギリス人のことを意味するようになった⁽¹²⁰⁾。この時代産業革命を始めて6～70年たつイギリスは、世界の工場としての地位を築きつつあったが、それを支えた市民階級の自信は、政治経済においてイタリアを完全に過去の国として見るにいたった。ただイタリアが文化面では再生する可能性は認めながら、政治経済では大勢からとり残されてしまった過去の国とした。「……長年のなおざり、抑圧、悪政がイタリア人の性格を変え、彼等のエネルギーを減じてきた。……また文学を野蛮なものに変えてきた。けれどもかつて彼等の中で良かったものは依然としていいのであり、いつの日にかこの高貴なイタリア人は、この灰の中から立ち上っているだろう。崩落した寺院の残影に、また荒廃した宮殿や牢獄の残石の中にイタリアは

教訓を残しているのだ」⁽¹²¹⁾。

[註]

- (1) George E. Parkes: The English Travellers to Italy. The Middle Ages (To 1512). 1954. p.585.
 - (2) *ibid*, 590ページより引用、Adam Usk "Chronicon" から。
 - (3) William Thomas: The Historie of Italie (1549). Facsimile. 1977. pp.1-3.
 - (4) Maria Dowling: Humanism in the Age of Henry VIII. 1986. pp.8-9.
 - (5) Italy and The English Renaissance, ed by Sergio Rossi ed Daniella Savoia. 1989. p.14.
 - (6) Renaissance England, ed by R. Lamson and G. Smith. 1956. p.106
 - (7) George T. Buckley: Atheism in the English Renaissance. 1965. p.69.
 - (8) こういう変化の中で、italianate Englishmenの概念が変ったとするのがパークスで、反宗教的、反道徳的なイタリアかぶれから、謀略家、反逆者の意味になったのだ、とする。さらにこの概念は1578年以後(ローマ・イギリス学院の許可)、隠れ伝導者の意味に変わったとするのがリープセイである。
- George E. Parkes: The First Italianate Englishmen in "The Studies in the Renaissance" 1961. PP.211-214.
- John L. Lievsay: The Elizabethan Image of Italy. 1979. pp.19-20.
- (9) Anthony Munday: The English Roman Life, ed. by P. J. Ayers. 1980. pp.5-21.
 - (10) *ibid*. pp.43-54.
 - (11) *ibid*. p.61.
 - (12) *ibid*. pp.59-60.
 - (13) *ibid*. p.59.
 - (14) *ibid*. pp.97-98.
 - (15) *ibid*. pp.63-64.
 - (16) Robert Tofte: Discourse to the Bishop of London, ed. by R. C. Melzi. 1989. p.21.
 - (17) John Stoye: English Travellers Abroad, 1604-1667. 1987. p.101.
 - (18) Thomas Nashe, Selected Works, ed by Stanley Wells. 1964. p.259.
 - (19) *ibid*. p.46., p.70.
 - (20) 拙稿『イギリスにおけるマキアヴェリ思想の受容』東海女子大学紀要4号、昭和63年参照
 - (21) Mario Praz: Machiavelli in Inghilterra ed Altri

Saggi sui Rapporti Letterari Anglo-Italiano. 1962. p.162.

- (22) E. Webbe: The Rare Things seene in Jerusalem (London 1590). Facsimile. 1973. pp.C-D.
聖地からの帰り道、イタリアで何度も取り調べを受けている。その都度長くトルコで捕虜になっていたことがわかると釈放され、赦金も与えられている。ナポリではイギリスのスパイとして6ヶ月に渡って過酷に調べられた。
- (23) John Stoye, op., cit. p.74.
危険が全くなくなった訳ではない。ミルトンはイタリア滞在中あまりずけずけ宗教問題を話題にしたので、ローマのイギリスジェズイットによる暗殺の危険に会っている。
Milton Prose Writings. The Seconde Defence of the English People. Everyman's Library. 1970. p.343.
- (24) John Stoye, op., cit. p.119.
- (25) *idid*, p.132.
- (26) キャベンディッシュ (Sir William Cavendish) のチューターとしてイタリアを旅したトーマス・ホブズ (T. Hobbes) など最高の例である。
- (27) カトリックのラッセルズ師でさえ、教会や修道院の紹介は勿論しているが、もっと俗世間の細々としたことに敘述のページをさいている。庭園、別荘、家具調度、装飾品など。
Richard Lassels: Description of Italy in "The Grand Tour and the Great Rebellion", ed by E. Chaney. 1985.
- (28) John Stoye, op., cit. p.114.
- (29) この頃貴族の館や富裕地主の邸はイタリアの絵画、骨董、彫刻作品でほとんど部屋中が飾られていた。
Brian Moloney: Florence and England, Essays on cultural relations in the second half of the 18th century. 1969. p.10.
- (30) アランデル (Arundel) 卿からウィリアム・ペティ (W. Petty) への手紙の一部。
John Stoye, cp., cit. 148ページより引用。
- (31) Spectator in "The Works of the Right Honourable Joseph Addison". With notes by Richard Hurd. vol. 3. 1811. p.416.
- (32) Remarks on Several Parts of Italy, in the Years 1701, 1702, 1703., in "The Works of the Right Honourable Joseph Addison". With Notes by Richard Hurd. vol. 2. 1811. p.77.
- (33) James Boswell: The Life of Samuel Johnson, illustrated by Gordon Ross. 1946. p.362.

- (34) Brian Moloney, op., cit. p.10.
- (35) Lord Herbert: The Pembroke Papers (1773-1780). 1950. p.172.
- ここでハバート卿婦人が白痴の宗教と言ったのは、例えばバイロン卿がラヴェンナでローザ・ベニーニという百姓の娘との会話で知った、あの盲目的で無知な宗教心を言っているのだろう。
- ローザ：パパ様ってだれなの、
 バイロン：知らないの、
 ローザ：パパ様ってだれか、なになのか知りません。
 ……聖人様のこと、
 バイロン：老人だよ、
 ローザ：老人のことを大げさに話すなんてナンセンス、……パパ様に会ったことあって、
 バイロン：ああローマで、
 ローザ：あなた方イギリス人はパパ様を信じていないでしょう、
 バイロン：ああ信じない、君はどう、
 ローザ：信じていいのかわかりませんが、司祭様がパパ様のことを話して下さいですけども、パパ様がなんなのか本当はわかりません、
 Byron's Letters and Journals (1821-1822). Vol.9, ed by L. A. Marchand. 1976. p.51.
- (36) Tobias Smollet: Travel Through France and Italy, ed by F. Felsenstein. 1981. p.147.
- (37) A. Burges and F. Haskell: The Age of the Grand Tour. 1957. p.117.より引用。
- こういう感情は人によって大きな差があったことである。ボズウェルなどはミラノのドゥオーモでその荘重な雰囲気感嘆の声をあげ、ロレートでは荘厳なミサのすばらしさ、群る巡礼たち、周りの神聖さに強烈に打たれ畏怖を感じている。
- Boswell on the Grand Tour (1765-1766), ed by F. Brady and F. A. Pottle. 1955. p. 44. pp.51-53.
- (38) Oxford English Dictionary. vol. 2. 1970. p.414.
- (39) Tobias Smollet, op., cit. p.222.
- (40) The Works of John Wesley. vol.11, ed. by Thomas Jackson. 1872. p.158.
- (41) Tobias Smollet, op., cit. p.222.
- (42) Mario Praz: Machiavelli in Inghilterra, op., cit. p.384.
- (43) Joseph Spence: Letters from the Grand Tour, ed by Slava Clima. 1975. p.76.
- (44) Boswell on the Grand Tour, op., cit. p.18.
- (45) *idid*, p.25.
- (46) Samuel Sharp: Letters from Italy. 1760. p.257.

- (47) Byron's Letters and Journals (1816-1817). vol. 5, ed by L. A. Marchand. 1976. p.189.
- (48) *idid*, p.167.
- (49) *idid*, p.154.
- (50) Byron's Letters and Journals (1818-1819). vol. 6. ed by L. A. Marchand. 1976. p.175.
- (51) 拙著『マキアヴェリ』(中公新書)第1章2節参照。モリソンはシエーナで伯爵夫人といわれている夫人を見たが、その有様に驚いている。「伯爵夫人といっても全く無視されている。侍女を連れて夫人が道を歩いていたが、彼女に会う人は誰も敬意を表わすものはいないし、教会では座る席さえ見つけられないでいた」。こういう光景を見て貴族制がないように見えたのである。
- Shakespeare's Europe, unpublished chapters of Fynes Moryson's Itinerary, ed by Charles Hughes. 1967. p.149.
- (52) イタリア人の倹約ぶりは当時ケンブリッジに住んでいたパラヴィチーノ (Sir Horatio Palavicino) の言によく表現されている。「ほとんど自分の財産は使わない。……そうしないと10年に一度は4つのことの1つに悩まされることになる。その4つとは、建物の修理、娘の結婚、訴訟事件への出費、主家へか郷里へのお返し事の4つである」。
- The Journal of Sir Roger Wilbrahm in "The Camden Miscellany" vol. 10, ed by H. Spencer Scott. 1902. p.22.
- (53) Fynes Moryson, op., cit. pp.149-154.
- (54) Sir Thomas Dallington: Survey of the Great Dukes State of Tuscany, in the Year of our Lord 1596. (London). Facsimile. 1974. p.29.
- (55) 森田鉄郎、『Mezzadria Classica考』、『中世イタリア都市の食料補給政策と農制との関係について』、共に『中世イタリアの経済と社会』所収、昭和62年参照。
- (56) William Thomas, op., cit. pp.5-6.
- (57) The Traveles and Life of Sir Thomas Hoby, KT of Bisham Abbey, Written by Himself. 1547-1564. ed. by Edgar Powell in "The Camden Miscellany" vol. 10. 1902. pp.53-54.
- (58) *idid*, p.19.
- (59) William Thomas, op., cit. p.189.
- (60) George E. Parkes: The Decline and Fall of the English Renaissance admiration of Italy in "The Huntington Library Quarterly" no. 31. 1969. p.352.
- (61) L. Collison-Morley: Italy after the Renaissance. 1972. pp.93-94.

- (62) The Diary of John Evelyn. vol. 2. ed. by William Bray. 1950. p.160.
- (63) Description of Italy, op., cit. p.176.
- (64) Brian Pullan: Occupations and Investiments of Venetian Nobility in the mid and late 16th century in "The Renaissance Venice", ed by J. R. Hale. 1973. p.386.
G・プロカッチ、斉藤泰弘訳『イタリア人民の歴史』I、293ページ～295ページ
- (65) Sir Robert Dallington, op., cit. p.66.
- (66) *idid*, p. 22. p.27.
- (67) *idid*, p.66.
フェルディナンド一世のもとで一時的にトスカナの経済が復興したことはあったが、長期的にみれば衰退していった。
Ruggiero Romano: A Florence aux XVII siècle. Industries textile et conjuncture in "Annales Economies, Société, Civilizations" 1952. pp.508-512.
- (68) Joseph Spence, op., cit. p.324.
- (69) Samuel Sharp, op., cit. pp.172-173.
宗教を軽々しく口に出してはならないことはすでに17世紀30年代にミルトンがナポリでGian Battista Manseio侯爵との会話で知ったことであった。宗教のことになる侯爵が口をつぐんでしまったからである。
Milton Prose Writings, op., cit. pp.342-344.
- (70) Remarks on Several Parts of Italy, op., cit. p. 37.
- (71) *idid*, pp.71-72.
- (72) John Ruskin: Praeterita. With an Introduction by K. Clark. 1949. p.247.
- (73) Fynes Moryson, op., cit. pp. 132-133. p. 398. p. 401.
- (74) *idid*, p.135.
- (75) *idid*, pp.405-406.
- (76) *idid*, p.408.
- (77) William Thomas, op., cit. p.4.
- (78) Fynes Moryson, op., p.164.
- (79) *idid*, pp.133-134.
- (80) William Thomas, op., cit. p.75.
- (81) 拙稿『マキアヴェリの市民兵制』歴史教育18巻6号、昭和45年参照。
- (82) Joseph Spence, op., cit. pp.349-350.
- (83) Fynes Moryson, op., cit. pp.415-416
- (84) Remarks on Several Parts of Italy, op., cit. p.18
- (85) Richard Lussels: The Voyage of Italy. 1670. p. Fi.
- (86) Fynes Moryson, op., cit. p.132.
- (87) *idid*, p.106.
- (88) The Voyage of Italy, op., cit. p. Fi.
- (89) Joseph Spence: op, cit., p.102.
- (90) John Moore: View of Society and Manners in Italy. vol. 2. 1781. pp.372-373.
- (91) ゲーテ・相良訳『伊太利紀行』中巻 274ページ～283ページ
- (92) William Thomas, op., cit. p.139.
- (93) ラッセルズ師はイタリアを訪れるイギリス人に特に強く推めている。「……ジェノヴァでは Admentati と称される学会がある。こういう性格の学会はイタリアの都市には他にもあるが、私は旅行する者にこういう学会を訪れるよう特に望んでいる。ビールを飲んだり、タバコをふかしたりして時を過ごすより、イタリア人がどんなに上手に時を過ごしているか、演説文を書いたり、詩を作ったりすることでどれほど毎日をより有意義に過ごしているかを知ってもらうためである」。
The Voyage of Italy, op., cit. p.102.
- (94) Fynes Moryson, op., cit. p.423.
- (95) Sir Thomas Dallington, op., cit. p.62.
ヒューマニズム研究の面では確かに昔日の栄光をイタリアは失っていたが、自然科学ではまだ先端にあったことに彼等は気づいていない。反宗教改革の進展は思想の自由を奪った。思想から離れた実験の世界にわずかに探究の道を残したのである。それでもガリレイのような事態は時と共に進んで行った。
- (96) Milton Prose Writings, op., cit. p.342.
- (97) The Voyage of Italy, op., cit. pp. Evi-Fi.
- (98) George E. Parkes: The Decline and Fall of the English...., op., cit. p.356.
- (99) The Traveles and Life of Sir Thomas Hoby, op., cit.
- (100) Fynes Moryson, op., cit. p.421.
- (101) Sir Thomas Dallington, op., cit. p.62.
- (102) K. J. Höltgen: Sir Robert Dallington in "The Huntington Library Quarterly" . No. 47. 1984. p. 148.
- (103) Tobias Smollet, op., cit. p.253.
- (104) Joseph Spence, op., cit. p.397.
- (105) Fynes Moryson, op., cit. p.460.
- (106) John Evelyn, op., cit. p.83. p.192.
- (107) Description of Italy, op., cit. p.158.
- (108) *idid*, p.166.
- (109) Robert Tofte, op., cit. p.21.

- (110) Fynes Moryson op., cit. p.469.
- (111) *idid*, pp.150-152.
 タリントンは「妻を家に閉じ込めておくのは嫉妬からではなく、習慣でそうしているのだ」、としている。
- Sir Robert Dallington, op., cit. p.64.
- (112) *idid*, p.64.
 Description of Italy, op., cit. p.151.
- (113) Z. F. Fink: Jacques and the Malcontent Traveller in "The Philological Quarterly" XIV. 3. 1935. P.240.
- (114) Fynes Moryson, op., cit. pp.150-152.
- (115) Boswell on the Grand Tour, op., cit. p.25.
- (116) Samuel Sharp, op., cit. pp.11-27.
- (117) Joseph Spence: op, cit., p.76.
- (118) Fynes Moryson, op., cit. p.162. pp.414-415. p. 465.
- (119) こういう偏見とか先入観があるから、イギリス人がイタリアのことを書いたものを読むときは注意が必要である。
- (120) Mario Grego: Viaggitori inglesi nel Veneto in "Voyageurs Etrangers a, Foreign Travellers in, Viaggiatori straniera a, Venezia ". Texte recueillis par Emanuel Kanceff et Gaudenzio Boccazzi. 1981. p.46.
- (121) Charles Dickens: American Notes and Pictures from Italy. Introduction by S. Sitwell. 1974. p.433.

[Summary]

Italy as seen by Englishmen — A Note for "A Study of Italy" —

The revival that Italy has recorded in economy, visual arts, etc in recent years is very remarkable. This urged us to make an attempt at reexamining "What is Italy?" and "What is an Italian?". Indeed, there are a number of methods available to accomplish this attempt, but in carrying out this research work I take up the traditional views and ideas by foreigners of the nation of Italy by tracing in chronological order. In this essay I intend to discuss Italy as Englishmen have seen historically. The fact is that Englishmen began to evaluate Italian culture in what might be called a proper way since the mid-16th century or about the latter period of Italian Renaissance, as evidenced by William Thomas' "The Historie of Italie", published in 1549. As early as the end of the 15th century Englishmen had been studying 'New Learning' (Umanesimo) at Italian universities, only for the purpose of studying for academic degrees. With Thomas as a forerunner, however, English scholars began to grasp Italy as it really was through the study of not merely learning, but arts, manners and the new way of life on the part of Italian gentlemen--what might be called Italian culture. For three centuries, the 17th, the 18th, and the 19th, an untold number of Englishmen travelled through Italy, and as years went by, they began to view Italy as they viewed their home country, and as England attained steady prosperity, they grew disposed to treat Italy and Italians with contempt, despising as a state of the past.

My essay is intended to make clear the Englishmen's view of Italy by tracing their ideas historically.